

脆性材料の破壊条件に関する二三の考察

京都大学 正員 工博 丹羽 義次

京都大学 正員 工修 小林 昭一

1. はじめに

本研究は、脆性材料に因りて現在までに提案されてゐる代表的な破壊説の物理的意味を、微視的な立場から再検討し、それを基に一般的な破壊条件を提案したものである。

2. 巨視的破壊説と微視的破壊説

2.1. 巨視的破壊説； Mohr の条件式，八面体剪断応力説，Tresca の条件等。

例， Mohr-Coulomb 式； $|z| = -\mu\sigma + t_0$ ，或いは $\sigma_2 = \frac{\sqrt{1+\mu^2}+\mu}{\sqrt{1+\mu^2}-\mu}\sigma_1 - \frac{2t_0}{\sqrt{1+\mu^2}-\mu}$ ，(1)，(1)'

Mohr の二次式； $z^2 = -\alpha\sigma + t_1$ ，或いは $(\sigma_1 - \sigma_3)^2 + 2\alpha(\sigma_1 + \sigma_3) = 4t_1 - \alpha^2$ ，(2)，(2)'

σ ；直応力， z ；剪断応力， $\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3$ ($\sigma_1 \geq \sigma_2 \geq \sigma_3$)；主応力， μ, α, t_0, t_1 ；材料定数

2.2. 微視的破壊説； Griffith 説，修正 Griffith 説等。

a). Griffith の概念に基づく引張強度

$$K_0 = \sqrt{\frac{2\gamma E}{\pi l}} \quad (\text{平面応力}), \quad \sqrt{\frac{2\gamma E}{\pi l(1-\nu^2)}} \quad (\text{平面歪})^{1)}, \quad K_1 = \sqrt{\frac{\pi E}{2C(1-\nu^2)}} \quad (\text{三次元})^{2)},$$

γ ；単位面積当りの表面エネルギー， E ；弾性係数， ν ；ポアソン比

l ；扁平楕円クラックの長半径， C ；扁平円形クラックの半径

b). Griffith の破壊条件 (二次元)³⁾

$$i) \quad 3\sigma_1 + \sigma_3 \geq 0, \quad \sigma_1 = K, \quad \theta = 0 \quad (3a)$$

$$ii) \quad 3\sigma_1 + \sigma_3 \leq 0, \quad (\sigma_1 - \sigma_3)^2 + 8K(\sigma_1 + \sigma_3) = 0, \quad \theta = \cos^{-1} \left\{ (\sigma_3 - \sigma_1)/2(\sigma_1 + \sigma_3) \right\}^{1/2} \quad (3b)$$

K ；一軸引張強度， θ ； σ_3 の方向から計った最も危険なクラック長軸の傾き

一軸圧縮の場合には， $\sigma_1 = 0, \sigma_3 = -8K, \theta = 30^\circ$ となる。

c). 修正 Griffith 条件；扁平楕円クラックの肉眼を考慮して修正すると次式を得る⁴⁾

$$\mu(\sigma_1 + \sigma_3) + (\sigma_1 - \sigma_3)\sqrt{1+\mu^2} = 4K, \quad \mu: \text{摩擦係数} \quad (4)$$

この式の適用範囲は，大体圧縮域と考へてよい。引張域には Griffith 式を用いる。

2.3. 巨視的破壊説と微視的破壊説との関係

Griffith 式 (3) と Mohr の二次式 (式 (2)) において $t_0 = 4K^2, \alpha = 4K$ と置いたもの) との等価性は Murrell⁵⁾ が証明してゐる。この場合，放物線の頂点は式 (3a) を，他の部分は式 (3b) を表わす。また，式 (4) を書き改め， $t_0 = 2K$ とすると直ちに式 (1)' を得る⁶⁾。このように，巨視的破壊説の根拠は微視的解釈に求められる。しかしながら，微視的破壊説は微小クラックから亀裂を発生するための必要十分条件を与えただけであり，その後続く複雑な伝播過程を経た後に到達する巨視的な破壊破壊条件とは必ずしも一致しないことに注意しなければならない。

3. 三次元応力空間内に表わした破壊条件

3.1. 破壊曲面；三主応力(歪)とそれと直交直線座標軸に選ばれ，破壊時応力(歪)状態を表わす点の集合は，この空間内に一つの曲面(破壊曲面)を形成する。Drucker⁷⁾ の物質の安定性の解釈に基づいて，この曲面は凸曲面でなければならぬことが分る。

今、破壊は応力状態 σ_i の関係するものと仮定し、更に、材料は巨視的に等方・均質と仮定する。これにより、破壊曲面は、静水圧線($\sigma_1 = \sigma_2 = \sigma_3$)を軸とし、主応力相互間に互換性のあるような凸曲面で表わされる。

従って、Rendulic面(一つの主応力軸と静水圧線を含む平面)および直截面(静水圧線に垂直な平面、 $I_1 = \sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3 = \text{一定}$)による破壊曲面の切に曲線と求めれば、破壊曲面の応答を知ることが出来る。

$$\text{直線変換: } \sigma_1 = -\frac{1}{\sqrt{3}}\sigma'_1 - \frac{1}{\sqrt{3}}\sigma'_2 + \frac{1}{\sqrt{3}}\sigma'_3, \quad \sigma_2 = \frac{\sqrt{2}}{3}\sigma'_1 + \frac{1}{\sqrt{3}}\sigma'_3, \quad \sigma_3 = -\frac{1}{\sqrt{3}}\sigma'_1 + \frac{1}{\sqrt{3}}\sigma'_2 + \frac{1}{\sqrt{3}}\sigma'_3 \quad (5)$$

$$\text{条件 } \sigma_2 \leq 0 \text{ および } \sqrt{3}|\sigma_1| \leq -\sigma_2' \quad (6)$$

と行くと、Rendulic面上の切に曲線は(σ'_1, σ'_3)平面上に、また、直截面上の切に曲線の π 面($I_1 = 0$ の平面)上への投影は(σ'_1, σ'_2)平面上に表わされる。静水圧線から直截面上の切に曲線上の一点までの距離 r 、およびその σ'_2 から σ'_1 方向への傾き θ はそれぞれ

$$r = \sqrt{\sigma_1'^2 + \sigma_2'^2} = \sqrt{3}r_{\text{eq}} = \sqrt{\frac{2}{3}(I_1^2 - 3I_2)}, \quad \theta = \tan^{-1}\left(\frac{\sigma'_1}{\sigma'_2}\right) = \tan^{-1}\left[-\frac{1}{\sqrt{3}}\frac{2\sigma_2' - \sigma_1' - \sigma_3'}{\sigma_1' - \sigma_3'}\right] \quad (7), (8)$$

となる。 I_1, I_2 はそれぞれ応力の第一および第二基本不変量である。

②、三軸応力状態にある物体を考えると、二次元Griffithの概念を三次元に拡張したSackの解⁽²⁾の示すように、最終的な微小クラックは、中間主応力方向に平行な面内に存在する偏平四角形ないし針状クラックであり、従って、破壊は最大および最小主応力のみの組み合わせによって、中間主応力方向に平行な面内に生じ、殆んど中間主応力の影響を受けると考えられる。この基本概念に基づいて、危険変換式(5)を用いて、二次元破壊法を三次元応力方向に拡張しよう。

$$a) \text{ Mohr-Coulomb 式: } \pi \text{ 面上; } \sigma_2' = -\frac{1}{\sqrt{3}}\frac{\mu}{1+\mu}\sigma_1' + \frac{1}{\sqrt{3}}\frac{\mu}{1+\mu}\sigma_3' - \sqrt{2}(1+\mu)\sigma_2', \quad 10^\circ \leq 30^\circ, \quad \sigma_2' \leq 0 \quad (9)$$

$$\text{Rendulic 面上; comp. test; } \sigma_1' \geq 0, \quad (3\sqrt{3}\mu^2 - 1)\sigma_1' + \sqrt{2}\mu\sigma_3' = \sqrt{2}(1+\mu)\sigma_2' \quad (10a)$$

$$\text{extens. test; } \sigma_1' \leq 0, \quad -(3\sqrt{3}\mu^2 + 1)\sigma_1' + \sqrt{2}\mu\sigma_3' = \sqrt{2}(1+\mu)\sigma_2' \quad (10b)$$

ベラヌーグ- m ($0 \leq m \leq 1$)を用いて $\sigma_2 = \sigma_3 + m(\sigma_1 - \sigma_3)$ と表わし、 I_1 と r_m との関係および θ を求めると

$$I_1 = \frac{\sigma_1}{\mu} - \frac{1}{\mu}\sqrt{\frac{2}{3}}\frac{3\sqrt{3}\mu^2 + \mu(1-2m)}{\sqrt{1-m+m^2}}\frac{r_m}{\mu}, \quad \theta = \tan^{-1}\left[\frac{(1-2m)}{\sqrt{3}}\right] \quad (11), (12)$$

となる。comp. test ($m=1$) および extens. test ($m=0$) に対する r_m は、それぞれ r_0 および r_1 とすると $r_0 = 3\sqrt{3}\mu^2 + \frac{1}{\sqrt{3}}\mu$ と得る。 $\mu=1$ とすれば、 $r_0 \approx 1.645$ 、 $\mu=0$ とすれば $r_1 = 1$ 、 $\mu=0.5$ とすれば $r_0 = 2$ となる。

$$b) \text{ Mohr の 2 次式: } \pi \text{ 面上; } \sigma_1' = \frac{1}{\sqrt{3}}\sqrt{\frac{2}{3}}\sigma_2' + \sqrt{2}\sigma_3' + \frac{1}{\sqrt{3}}\sqrt{\frac{2}{3}}(\sigma_1'^2 - 4\sigma_1'), \quad 10^\circ \leq 30^\circ \quad (13)$$

$$\text{Rendulic 面上; comp. test; } \sigma_1' \geq 0, \quad \sigma_3' = -\frac{3\sqrt{3}}{2\sqrt{3}}\sigma_1'^2 + \sqrt{2}\sigma_1' - \frac{\sqrt{2}}{4\sqrt{3}}(\sigma_1'^2 - 4\sigma_1') \quad (14a)$$

$$\text{extens. test; } \sigma_1' \leq 0, \quad \text{"} \quad (14b)$$

$$I_1 = -\frac{3}{2}\frac{r_m^2}{\sqrt{3}\sqrt{1-m+m^2}} - \frac{1}{2\sqrt{3}}\frac{1-2m}{\sqrt{1-m+m^2}}r_m + \left(\frac{1}{\sqrt{3}} - \frac{\alpha}{\sqrt{3}}\right), \quad r_1 = r_0 + 2\sqrt{3}\alpha/9 \approx r_0 + 0.544\alpha \quad (15), (16)$$

$$c) \text{ Griffith 式: } \pi \text{ 面上; } 2\sqrt{3}\sigma_1' + 3\sqrt{2}\sigma_2' \leq 4I_1, \quad \sigma_1' + \sqrt{3}\sigma_3' = \sqrt{2}\sigma_2' - \sqrt{2}K \quad (17a)$$

$$2\sqrt{2}\sigma_1' + 3\sqrt{2}\sigma_2' \geq 4I_1, \quad \sigma_1' = \frac{1}{4\sqrt{3}}\sqrt{\frac{2}{3}}\sigma_2'^2 + \sqrt{2}\sigma_3' \quad (17b)$$

$$\text{Rendulic 面上; comp. test; } \sigma_1' + 2\sqrt{3}\sigma_3' \geq 0, \quad 2\sigma_1' + \sqrt{2}\sigma_3' = \sqrt{2}K; \quad \sigma_1' + 2\sqrt{2}\sigma_2' \leq 0, \quad \sigma_1' \leq 0, \quad \sigma_3' = -\frac{3\sqrt{3}}{2\sqrt{3}}\sigma_1'^2 + \frac{1}{\sqrt{2}}\sigma_1' \quad (18)$$

$$\text{extens. test; } 5\sqrt{2}\sigma_1' - 4\sigma_2' \geq 0, \quad -4\sigma_1' + \sqrt{2}\sigma_3' = \sqrt{2}K; \quad 5\sqrt{2}\sigma_1' - 4\sigma_2' \leq 0, \quad \sigma_1' \geq 0, \quad \sigma_3' = -\frac{3\sqrt{3}}{2\sqrt{3}}\sigma_1'^2 + \frac{1}{\sqrt{2}}\sigma_1' \quad (19)$$

平面(14a)および曲面(14b)は、 $\sigma_2 = -2\sqrt{2}K$ で接続し、この線上で両者は互に接平面を有する。式(14a)、(14b)に対する

$$r_m = \frac{1}{\cos(\theta+30^\circ)}\left(\frac{1}{\sqrt{3}}I_1 - \sqrt{\frac{2}{3}}K\right), \quad r_0 = 2; \quad I_1 = -\frac{3}{2}\frac{r_m^2}{\sqrt{3}\sqrt{1-m+m^2}} - \frac{1}{2\sqrt{3}}\frac{1-2m}{\sqrt{1-m+m^2}}r_m, \quad r_1 = r_0 + 0.544K/9$$

を得る。なお、修正Griffith式(18)の領域に対してはGriffith式と、また、元領域に対してはMohr-Coulomb式と等価的な表式はないので省略する。

3.2. 等方均質脆性材料の破壊条件；以上の考察に基づいて、次のような破壊条件が与えられる。つまり、二次元応力空間内に静水圧線を軸とし、主応力相互間に互換性を有するような凸曲面で表わされ、次のような傾き θ に接する二種の面から成っている。一つは、 $\text{Max.}(\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3) = K$ (軸引破壊)で表わされる二組の平面から成り、その直截面の形は正三角形状である。他一つは、静水圧の増加に伴ってほぼ等方的に膨張するような曲面で、その直截面の形は正三角形ないしやがや丸くなったものである。巨視的に、破壊はGriffithの条件に比し、静水圧の増加とともに速やかに膨張する曲面と等価な形で与えられるのである。

Rendulic面上の切に曲線は、近似的には放物線か或いは直線と近くなることを示される。

- 1) Griffith, A. C. Phil. Trans. Roy. Soc. **A221**, 163-197; 2) Sack, R. A., Proc. Phys. Soc. London, **55**, 727-736; 3) Griffith, A. A., Proc. 1st Int. Congr. Appl. Mech. (1911), 55-63; 4) Mc Clintock, F. A. & J. B. Wash, 4th U.S. Nat. Congr. Appl. Mech., 1912-1921; 5) Murrell, S. A. F., "Mechanical properties of Non-metallic Materials", ed. H. H. Walton (1957), Butterworths; 6) Brice, W. F., J. Geophys. Res. **65**, 3477-3486; 7) Maier, P., Drucker, D. C., "Structural Mechanics" ed. J. N. Goodier & N. T. Hoff, Pergamon, 1967-1968.